諸佛

帝表殘

乾

中村俊定文庫
文庫 18
491
1

宮城縣図書館

秋

ちらほらとしく秋をとふほゝ　其明

うき世外に住ふ鹿の住ゐ哉　烏光

秋多つ日の暮ゆく芦ゝ哉　志ゝ尾

むし鳴を京家鹿の蘭哉　楚川

秋日や鶏うほ咲野夢の中　其明

中村俊定文庫

蕪村はたゞ人ならんきれひなる
旅人や紅うの花見て通ふ　麥流
紅白の負籠ふるはれ蕨かな　徐風
背戸の梅　相の山風の初嵐　童川
紅中白秋の色を一葉の南　又玄
紅六の蕨相の葉のまくれ　五燈
さ晩のあそびてつとまかふ　麥語
櫛の歯のつまれ山うつ
あちらやはこかきさて言ふ　其明
芦風

星はいつまで起て見るまい間かな　烏光
何百の川おのまと星ひかる秋　路風
白色農証ゆゆふ星を何　麥語
六月の雨炎のあるくまれ　如翼
子の蕨蕨蕨なれ躍の夢や見ふ　古文
踊子お辻燈籠をかきつふ　梅子
燈籠の白不ちゝと猜の形　片芦
蕨を　お言燈籠の白久保　志ふ尾
かもりゆく言燈籠の形小　皮文

いとけなき父母も祖母の育せきて人と
なりしの乃年月西域にまたゝくちるゝ
慈悲ゆきさきり竟むゝふゝ中屋ゝ
祖母のゝ孫ひさまつき侍りて

父母乃ふゝ身ゝ乃ゝ魂ゝ　其朋
ゝ乃ゝ孫ゝ小ゝ孫ゝふゝて見ん　其雲
竟ゝ桃ゝ花ゝくゝふゝ花ゝ忘ゝむゝ　孤右
桃ゝ経ゝ年ゝ　梨山

年ゝ哭ゝ忘ゝ婦ゝ麻ゝ衣
ゝ男ゝ盆ゝ会ゝ
たゝ乃ゝ桃ゝ母ゝ乃ゝ位ゝ　楚川
稲ゝ　此路

いふゝ乃ゝ堂ゝ忘ゝ志ゝ武ゝ秋ゝ
ゝ火ゝ薄ゝ更ゝ雲ゝ　義仲
松ゝ　孤白
墻ゝ　楚川
ゝ乃ゝ　左文
ゝ乃ゝ　曲城
ゝ乃ゝ　烏光

寂寥ゝ乃ゝ地ゝ
ゝ乃ゝ侍ゝ
ゝ乃ゝ　其朋
ゝ海ゝ　眠虹

花さくみさをてし嵐のきりぶ　嵐渓
擅木のもとよりうるさきこの南　芦笛
うぶ雪降花明きて暮ふし　鳥光
くきりてよ武木樵のはりかふ　夢流
新の瑠璃寺東窪てちふもけ　楚川
階院小人をうるる木樵の那　牛涼
鶴既の面を水ぶし ゆ屋ぶ　左文
面乃萩人まれ燒竜清ぶし　其明
むる萩やおもひ下ぶきし 紬の影　明二

まる鶏ぶ生ての牡き昇竟ぶ　麥語
むきぶと苔ぶ苔さ形ぶ大木ぶ　眠紅
乗ぶひかるしてつ不我角力ぶ　祖明
八郎や縄のまるきの新さぶ　其明
山明しの坂中ゆ寒しきぶ　踏風
うまるると寒ぶ松のまる水南　菱花
面乃葉山ぶ月秋ぶふ見ぶ霊り　其明
記明ーか明ぶ引居ふ寒ぶち　孤面
仙ぶ見ゆ乗仰ーふふこへき　映鷺

暮くる秋の面わふち搖ル　左咲
ひとり栗やぬるゝかひし秋の風　其明
京中や人まきくるゝ風乃風　南柳
れいやふるむくあゝ秋乃風　惠徳

詞　栗は　墓

ひともとのさゝやぬるゝ
憶元孫のもゝ　蕉風ひゝ
きゝ京國ゝ　吟元孫のむゝし

きり暮て墓ちの秋風きくゝ日ル　志ふ尾
吉き水星ひとりさ乳よ深ゝ勝　花由

秋風や搖ふのきて暮乃くも　孤白
明るゝ妙きゆく人乃面の南　眠虹
明月や野末ゝ紫の庵ゝ有　此路
名ゝや岳数つふゝ舟ふのまゝて　楚川
ゝのお志ゝく石をゝくゝル　田城
明ゝや能見ふゝ乃山やき　春池

松嶋良秋

松嶋ゝ松しの月秋ゝ更妙　志ふ尾
奥羽行李の句々ちる集もよひ
ふゝ里てつゝゝ一句をのゝ出て

何鷹の角うちあてて月秋の角　左禁
まり角や柴舟よりは加賀俗　踏風

もとの人友きうもるのけ秋を
たして蓬臺のいきまか多玖
弥し有明山又入新を嘆紙年の
奥をうらやましつ〜ふ〜〜り八道の名を
ひつくる三里いなりておくれしも
巌上よりうさきけ伝ふ月を一時く
きく桂るちるまる家ふる峰の松風
いなく更ふう

かしの里を姨捨て山のふの家　宝明
月さを丸姨捨寒くふ里はら　安流

明るるお仲の中形ふ多九ケ　同
放生會代日の演を伝ををふ　其明
を川汐の仲さ〜接く見ゆふふ　左咲
家鮎ふ志き〜築のくつまふ　跡山
明るちて多くを白形ふ伝ふ引　楚川
ちるをはや先ゆ俊(修)る形の声　其明
新風や城をみきりよ广の新　立帆
薄芦や星を〜にけをも衣くつ　左咲
や居きハい流くようつ沾か形　徐風

うらのきやかのをちかたの鳴子　翠路
秋の野山風吹くたるかきふ
父乃身はうしろ鹿ときおもて
ふるとへ見ふたときのふにまきれり　左嘯

悔ふたをりはなせまふ深北空　眠虹
秋長きやすれ女つぬやく碁盤　路風
百乃伝ふ一儀つきてきのこ指　五烟
菌ふ鹿蘆を唐ふつふ音ふ　曲城
家しの庶嗜秋とふ里ふり　稼秋
かなをつきて庶のも波きを秋外　其明

庶さく秋や庶嗜ふ秋の秋乃ふ　眠虹
秋虹ふ鹿ふきえて亜風のふ　烏光
ものふさ北秋の秋あきく例秋外　麥語

秋毫亭ふなそひつきつぬふ口を
ふらふるつはすまてもふるふ一日蘆秋の
他をのそむて秋八盃として孫葛ふ歳
庶八世のふふれをふるふ最大魚ふまし
主おさひふををはふれるふ

鮒しく北尺ふ秋角魚の舌ふふ　烏光
ふへ
くをふへ
ふへふ角きハ流ふ東紅系　其明

九月九日たこの山を越ふ

きくのき婦飯白もの山路ふ　芭蕉
きよ九日ち菊採て通ひきり　其朝
中為え人ゑ乗きりきくのきふ　楚川
菊乃ふいや老人ゑ組やしき　振白
ゑ姫ゑ松まきくと坂中の南　麦語
のちの月宇多の帝ゑ戦むけし　芭蕉

岐蘇の桟道

ひくもてたとホうちゑもこつふ蓬
ゆきふ人の酡敬ふもれふしき秋ふゑ　や

紅葉してもみちふきりたゑの秋　惠徹
秋のくも伏屋の留ゑもたとたりそ　や
秋乃暮門ゑ多つゑふかきふし　其朝
日のいぬや蓬ふり敷秋のく祇　芭蕉
ゆ秋やいをちちゑ平ち祇　李井
ゆく秋ゑ見てふ川星のきふりぶ　風馬
り紅や星をせ徳埴ゑ風ちたく　楚川
くきてゆく紅や媒ゑ九ゑ峠　烏光

冬

たくあんや白膠木の葉もちらふら　眠紅
ちる枝や茅十そり時雨かふ　此路
磬たく家を隔はしくまの南　麦邑
たく炭やちりつもめふ音　五烟
日やせしふ彼岸こむ乃麦　玄明

門おほ柔柔し柿のこと木の南　振白
まきりや直そ恋ゆる木の葉ふ　習谷
柔柔てやさはる見れそ小城ゆ　巴芦
子やおもみ木の葉ちらすと猿の声　楚川
柔ちりれ大根焚ていさこかの　砂陸
ちる乃弦の中ま麦まく男ゝ那　此路
小春とそ時る面セ男ねの地山ゆ　同
踏籠や蛞蝓の用多き神のるそ　永潜
ものふ下忘やゑ多ゆ時鶴の声　其朋

俗つく教茅とゐるときり夷　謙　南鳥

魚の骨ゑしうき世の恵笠　謙　烏光

菊つくる人の仙を志しいな　斗涼

の仙の苔庭ふ成燭の角　眠和

菜は苦ふをはちふ男教はのふ　楚川

十月の掘つわめふ本節か那　ふく尾

山茱花の咲きり梅をかくきぬ　烏光

冬の蠅屋一時のきふひの角　斗南

入る花日中の陽しるる也　同

田たるも野しや野茅の帰苦　其明

野一羽ゑつ教野のやくの角　素井

連ふちあきもし小野ふ　至浦

松暮てゐる庭む入にかふ　片芦

ゐ鳥のやきぬひのもき孫ふ　女笙巴

な孫やちるりるさを波から　其明

磯るやちるの茅入ゆあし　烏光

しは松やきふふふふ元ゑ　跳風

磯やあき秋や実きちと事嶋　楚川

みそさゝぎ時雨て暮ふきり　麥語
梅乃木ふ崔鳴ちりみそのくま　其明

嵐せ男くも散りきりしこゝろ
秋毫言ゝ世して眠おをくふ
さしゑ鶏鳴るを乱去ふのそ
崔鳴てねゝるかくふゝそまゝ
くきてものゝ二せりゐいつきゝ
みゝん

伏とゝ武のゝきゝゑ乱きりそみそさゝゝ　志ゝ尾
みそ筋やふきて絵の志つ形り　眠虹
みそたも里堅るものふひとりの南　項布
てつかしよ愛せみゝりゆみそ古里　扒白

時守やゝるきとこ波ゝみそたも春　麥邑
冬篭伏里ゆとゝ切ひとゝ　琴嘯
めゝ子ゝ袴くまゝりみそこもり　其明

母乃病床ことせてゝりふをつ
ひさゝちゝ系佛してゝ形きゝを
のゝそ多ゝふ孝子いゝりてゝくゝゆ
ふくさ乱ゝる伊ゝ言ゝ

みゝ未きりこの系ふちふ暮釈せや　麥語
冬の月伝し塩屋のあきつ里　左樂
寒月ゝきつ冬の口ゝふ七橋ゝふ　路習
罪ゝ獺のつきゝふゆゝ屋ふ　竹翠

陵きとや大きふ河の豚の拔てゐる　如貧

ぬるけは蘭乃箸おりはちく　留丈

ふるれゆ屋根嶋かすゝ　禹川

風戸崎ふ仲のきさ皮　伏龜

こかゑ山や花乃紬をふ里り　磐彩

風は拔ぬきし中ゝ　宝竹

つまゝと拔無るとやきはゝゝ　鳥光

冬このきや夫ふ声北山ふ　麥語

冬乃拔やいる老女の糸車　自来

三尺乃叙研居ふ寒沢の南　其明

そふ墓ふ八声の鈴北宮ゝな　孤有

世や石や哀の河ふのさきふ　麥語

雲至てかき外の骨あハ根ふ　研石

やとれやゐちふ哀のきふ前　翠連

哀の恵　稔　朝の母とやさも拔　花卿

父の七周忌ふ建碑の石髮を

そきつ具しゐふ弔等を中ふ

又の面をとゐぬ河て明くを家をや

まふの哀さゐ思くも後睡ふのまふ

哀るや弔ともゝ　髮の長　此踏

撫子も立きせてあると秋の哀　かそ
つふ屋竿は尾長鳴くあのくれし　南鳥
きちりひは琴ちふ屋居ふこ月ふ　路習
屋のそをふ青い立遠くとひよりう　駒弥
日氣中や榜のふ灰つもふる　麦語
不角の笠や更ぬきされ大い流星　斗南
相撲桶人は加きてゆふ屋の形　其明
屋電や日くしの山お流　映鷺
きく燒乃ぬりつ見ふきふ月ふ　烏光

くらき秋はあ流はふ降木ふ　其明
おもてもも降しる重ふ形ふしの新　麥語
いさふ茅海のふるきり雪乃くま　此路
をつ重やきの月ふ薄きふ農毛　乙徑
岡はを戸をふくふや重を捨ちう　義艸
みのかさやゆきを見ふも雪は暮　さち
かりさをそふはと重は降ふ茶　其明
ふ月をて　ふ乃数を秋の重　ふふ尾
ちう道やこふ不をのふをりゆく　蓬宇

道角元　小田切てつまや落葉　巳仲

松風やつまをこ不まそはつき純時　枚布

掃抱てあ純ゆ居ふ庵の角　中和

こもる居て凍ふ昔きく深秋ふ　楚川

明星や凍わくして岨の鹿　其明

みいくふふ世基ふ
をめふなるさをおふ

月星や手つまるも城のかき　同

功も朽くあるお走とふ夜きぬ　麦語

四時混雑　ぬしの更ふゆくしを
そのてくまを遠ふぬ
友とちのカくちう

仁乃徒何ほかきて　月秋の角　矢代

深冬貧す屋根の小ぶ地落あり　路因

角農老おもふ戸ふそひと前咲　〃

ふ立やきさ冬日ふ前閉ら　〃

うき屋のつ秋を世利春乃風　渭川

日あるりや陳沈くと俳笑い俳　楚栗

かさゝきて雀の声ときく夢かな　星白
たゝしやきりあしぬるに藪乃音　雲蹊
白乃石に龍か飛てくりは宮八ッ時子　維三
大宗農しら礁のひとつゝや　乙古
紅かくやきの帰る春乃数あかし　如川
白き翁やはくまゝのつえ二本道　柴白
白鷺気きまれふるに中夕きみ　、、
白小乾て寿まにき利支亘の康　、、
あかゝやくくなかくれ北里　、、

ゆふ桑やはだ明ましき咲と露　鳥奴
翁家お雀田ゐ小橋乃くつ見に　、、
蟷螂乃白はあひるふ中夕を分ふ　、、
しくきぬふ縁人貴ゐ家とえん　、、
薊はくおはふとかゝを見ちなかり　鴻雀
川名きやたかみぬまへ?嘯ちとり　、、
けゝ露して老木のいはかふりき雪　松吟
たゝしふ坂はく音も文ふかり　其一
田つくまや虎をはせる味なく　兎耳

はつ牡丹　見出　聖地探き　簾雨

雨はれて暁　鶏の鳴くつ旅きり　、

屋汁桶の　ちふ日はたつゝや　麥雨

月こふふ秋まの　雨ゆゑ　、

鶯やはたゝ　ふつりの人の家　蕎雨

ちつまなゐ　みそ　時に又降ぬ　、

ゆゝ雲や　樽　ゆゑ　いゝの　ゝり　紫蝶

さゝ雨　雨の　痩ふふ男　の　、

花椿　婦　ふを　見　ゆん　雨雨

秋の雪　いゝ　ふゝ　酒　鼠　、

蓮の　へを　ふ　月　の　百之

ゆそゆゝ　妙　舟　向　ふ　ゝ　、

戸ゆゝ　ゝ　暮ふ　春の　風月

舟　ゝ　結　わ　向て　駒　声　三雨

ふの花　鶏　ちつ　ふ　雪　京石

没ふを　没の　乾　ゆ　風　ゆゑ

つ　揺　ゝ　ゝ　山　路　ゝ　九子

くもちく　紙　後　郷　の　松　ふ　まん女

さいとりやの鶯ぬとさう見とかふ　文馬
山住をうぐいすぬもりの花ちり　ふ同
ゆるまつぬまの鶴ものとかふふ　月湖
梅見んとて乃をを抜おろうん　雲古
陵や暮ふりぬ　よのこれ童　ぬ明
長武のはやいとはひの綿をつゝむ　柯亭
袖ぬぎ　春乃小雨や長閑　東戸
くふひ子ぬ袖おちをのちふく　百足
帰乃呼乃小松かゝ花きり　素風

面代ぬ小屋をかきゝ岩ゆるのふ　楠二
て数百ぬ松ぬ花ぬ植根の南　和ク
かゝ的乃音や深沢乃雨ちふ　指尾　鳥布
ゆの仲ゆゝて乃ぬゆて乃ぬ　徳同　佳夕
山くを三くを里を里をかふ　中邑　指山
ちをちゝう遠いとゝ鶯ぬゆゝふ　鳥閑
笹あきて浦ぬをやゝ涼の南　八幡　踏一
古株をかゝつき見きい蔵か鶯　異山
いゝひをを梅ゝをくんゝちきりきゝ　五泉

笛乃音も地獄まで春の眠り哉　播磨山　冬翠

燈燈　煤まのを秋宮中　瑳川

麥畑や猪追ふ中をたゝきまで　信濃川　野曉

たぼひかまむ形支小貝ひらをや　丹後嶋　一瞬

ぬつくゑまひく遠田きぬゝこのふ　、

ゐをかゞ松を掛けの京乃秋　百和

山のきや嵐まもゝ免て椿ちく　寸雪

没ふかをうち井まを乗乃日ちく哉　汐延

庵の戸や山田乃鹿の啼荒を　葉山

鹿乃声ゆて孫うき枕乃形

閨ゆ秋や坪のうちふれ点椿　世永絶　絶　下乃絶　楊　伊　舟

かゞゐ乃毛乃毛もゝ春日哉　尾合

ゆくらふ境菊の向ゝ巖乃形　野留　善光寺

麥木綿乃白ひや微乃の時乃り　桂士　魚　押田

暮ちゝ向ゝまを雲ふを木ハ　東　乃　年礼

七種やつゝゐく松乃ゑもき　文　夕　紙門

秋山やれもひ切ゐふ猿の声　留中

一さいふゝ秋とちゝ多冬乃空

、

きゝ〳〵雁をかゝふるやその時
音〳〵やかゞ田ゝ〳〵て庵の軒
佳ゝやゝ思四月の音も絶
目のさ色秋ゝ彼や芦枯ふ音
きゝか浦の夏きゝ形ゝ〳〵木ふ
何れ〳〵細ゝ〳〵この夕雨の雨
旅人のゝ乃ふ孔雀乃一ゝの形
乃ききふや松のひゝ乃ゝ〳〵ゝの魚
ゆふ雲ゝ小藪をけて鵜ふ

別所 雉鳥
、
きゝ羊
、
拙 狐
狐 鹿
大露
文蔵
塗馬

雉乃鶏黒武馬こそいふきれ 吟而
ふ乃に一衣をぬゝきゝゝゝそ 塚 鵬
ゝ乃休農蔵ふ乃ふ日中ふ 鳳 乙
風雲て野等月の堤の雨
巣乃雪ゝ武を ふ
枝ふきて枝乃ふ武法武
紫乃戸や当形ゝ白ふ武法武
何孫ゝむゝふ梅の毛 主 狐
月ゝかゝの木ふや咲ふむ矢の雲 別所侍 一壺 侍 拙 渓
夢続

畑うちに陽炎もゆふ春日の前　根津停 鷺江
宮の巡禮ゝあるたゝふ　尾野山 文竺
桃咲て何のありとて咲て大黒　上田 季二
死ぬよと念ともけ世を照らん　、
高芽や桃もさく紀のひろ川原　、
不淑くと山鳥の鳴しくもふ　、
口ゝ井や大竹原乃藤みとり　中古
厂鳴や松も畑を流くの雪　玉馬
氷等ちらり鶯飛衣乃くもりふ　路紅

青柳や人ふくさむふ下が恵　眉英
口ゝしもりに松明も子寒の南　已百
ゆふ御乃むまやぬらん中ふしくも　松梢
飛衣や渓に個をうち入ふ　玉桂
春風に出鷹の如くぬもとふ　如鏡
時鳥鳴て柳乃そく木の形　和雪
名ゝやかしもたされの松の人　葉茶
山ぬくゝし見ちゝ如揚より青山風　百石
松風に戸のかゝく青や名たもて　、

藪いとり重駒ならして砂ぬかに　よ苓

ちらちらまきすゝ声をふりまぜ　〃

長深さや走りとてゆくゝ流つ表　芳洲

俳仏あり巻にとしより五月雨　重賀下

春秋月馬上ふゝ乃物かゝり　井々

いつ屋て隙るはしるも見ゆるかに　〃

秋乃花ふと情みて咲ゝきり　〃

度乃重巻にとゝ絶ゝ巻ふ紙のふ　〃

ひともとの机ゆゑ新〻接巻の事　松架

ゆゝくまとやふ欲ふ机のつまゝ美　其井

巻秋ふゝ見しきり作鶏　よ石

屋雪やゆをねくゝまみそゝゆ　露井

重宝や雀書を啼石ゝ俳　五声

春ふ秋やち儀ゝりつくゝ　坐井

ふゝ乃ふ山鳥のふ机巻ふ新　〃

ゝのゆゝふ山場やゝ秋ゝ　三机

ひふかほゝ蓮墨かゝゝ俳ふ　〃

ゝらゝ吉やゆゝもの庵ゝ時ゝ鹿　〃

あまたちとりつゞかさる小傘　爭茂
音やこゝやほとゝぎす　悟蟬　柳潛
かゆを炊やゝ貧女の聲の音　旁隙
ゆそ川ゝ重冊のゝきゝゝ暑のふ　志げ女
ゝ川重や秋外籠ゝ待つき　二芳
ゝ松ゝ岬のちゝゝりゝつゝふゝ　生羽
床のふゝ冬ゝもふ暮ゝん南　め毛
ゝかさや園のゝりゝちゝふふ
ゝゝゝの松ゝ冬ふゝゝりふき孝

好ゝ俳柱かくまゝ人ゆゝし　、
松のきゝゝゝ女流男庶の形　、
いきにゝふ松ゝもゝつゝちゝ　雲帶
くゝゝつゝに井ゝゝ蛍見ゝ　、
憑　悴　烏府乃中ゝ蟬ゝ　、
葉ゝゝ尾長ゝゝ　、
秋ふいゝゝ後ゝ梅ゝふ　梧夫
月ゝゝ　ゝゝ乃かゝ　、
ゝゝやゝゝ秋農音ゝ

罪ふ登人のつくるゝ世の雛　、
ゆふ霧川越路乃さくらの中　茶烟
かんこ鳥啼や木の小所居とこ流　、
ひふ所々や々くもさつ康乃ゆく　、
志川しくも里境とゝふ里にきり　、
うるはしき着そめん山乃田植ふ　有常
くらしは鹿の鳴音や更の灯ふ　、
山寺や摺お流せむきしの声　林子
谷ゆききし文しも未蝉鳴る　、

鶏起やゝ戸完き八世のおふ流人　志仙
たつ鳥所をのこ店ふ山田ふ　、
鶯農家啼除て帰りちる　朴之
ふつゝりと遠山桜咲にけり　斗石
くもむしめ鹿もはねてゆふ露　左十
秋たちて妹乃句ひや出菜女　、
紅葉見や岩に火を挟む翁達　、
風に向てかく鴨のつゞき　、

見聞　并文通

人ちらぬ雪ぞ皆やあるや庵のいき大根　江戸　門忍

たらしや牧ひとりのたまふまま馬　秋瓜

雪はなをこふにつり舟とふまぐり　尺五

言裾る市女遠ゐ山ちくまぶ　敲水

白乃後夢ぬ男仏そ花のろ　昔坊

言探る遠ゐして牡丹八　夢太

梅のつやきさ見まぶ八ぶ十　冬英

庭掃てしらの家をふっ色ろ　夜庭

氣ぬ一て梅ひるちゑ梢の南　武八王子　書橋

紫や想ゑ木の中を人うゆく　槽田　平居

つ乃雪塵も苏もふりき利　鴻巣　緑市

ぬをきゑ氣をふもふ時白ぶ　冥田　柳儿

庶等や苔乃道れおつふ　東武　文卿

ゑ王花ぬとこ衛氣ゑつきり　抵白

きゑきる湯答うきふひゑ張　巨計

ぬきてゆゝ暮るはたくはの白乃幡　普成

春の風屑屋も見ゆるなるかな　下總千葉　古孝

道乃邊やちるあの木の戦き　寺嶋　松天

鹿やの川板とらふをとゝ兎　僧　大虚

一面農あとや唐木の枝　寒川　素行

松を出のくらふ青き昼の南　暑　梅設

おをひ形武蔵乃鳴や門ちゝ　晴波

蝙蝠や箱のてつまる捲きゝ　素戸

むらひ岩や遅くゝ曼殊の花　武州我孝　兎石

ゆふくゝ乃西瓜ちゝみる這子ふ　眉尺

百姓日わ鹿ちゝくゝ中まつ食くゝ　徐舟

ちゝ多きや茅ゝ彩瑠の志ふ舟　陸奥　鳥哥

ひふ中の小百ひふひふ尾花ふ　蛇子　百井

杜宇ふのゝ武蔵　西中ゝ形　四光

そゝくゝと庚申塚乃椿か南　胡金

川志もやちゝんふ鹿　粉の舞　鳥朝

伊とゝくゝ梭桐の日ちや秋乃風　上總東金　百林

童やゝひゝりゝふ野の中屋ふ　主梅

地車に水多はたく堤この那　田岡　巴井
て行の時ちかく貳ふ農ひとりかな　森　有傳
はらしや孫なる時雨ひときり　曙　祥風
ふふかほの咲て健遊の歸り　曙　月
きく時やなる乃ふゆきれ九折　常陸庫時　快辛
春百やうつ屋くと旅つゝ乳　下野日光　萍玉
人見しきいふつゝ明里寒至秋　上州高崎　亦碌
鄭時や馬ちかなる罪乃あ　和榮
みそさる栗うゝ頃知行くらふ　谷仙

やうゝゝ山茱萸咲ふ小庭の明　田岡　白什
鹿ちゝや爾ゝもとの入日赤貳　奥州郡山　布
重乃中ゝ折ゝ鄭ゝ厩の南　也蓼
ふゝゝや廓の生れつゝこ流　仙臺　板美
いつき種いつきや沈ふ者ぬくる　吹路
長き板や重箱と縫をうゝ　俱川
廣乃皆もつきもきる時憐悴　時来
もゝ爾ゝゝ者ゝ行のふ秋風の南　古川　定之
編幅乃秋深ゝもとふ折木ふ　玉英

出て見てもせまるぬき形山橋　つゝ岳　尾井
庭掃て秋の つゝを覚きり　佐沢　醉石
魂祭さひ〳〵あひふ乃竹の形　柳倉　登音
庭系遠ふ機をかそへ乃柔月　白河　松柯
紫れ戸ゆ乃えゝ〳〵ぬきる蛍ゆ　羽州五百川　鳥黒
冠り陰を代をれ形里　越後十日町　羽扇
の毛毬庭　ぬ里むきた日の入ふ　山之
蛍や誰を乃ぬせ脊戸の松　高田　春亀
尾をなきて乃吸ふ雑ゆゆ乃ゆ　一音

逝吹乃大うをかれ里秋乃重　越中高岡　仁由
月なゝ橋もふ秋ぬ多をかゝ　馬丈
宗文てめ〳〵かゆ里ぬ庵の那　加賀津幡　見風
答ともふてゆを木乃志つゝかゆ　今石動　文琴
ちふ木の系稲を系人のゆもとを　金沢　志良
梅を ゆ、花ゝ紙ひて奈寒ゆ　松任　巨井
第畑やいゝゆ里くきを弱きく　小松　素園
系の毛ゝをもゝ而乃てゝ先ゆ　越前丸岡　仏仙
ちゝ梅の寒きも障ふひと〳〵　梨一

飡ほすてゐる蒲団ふとんほのぶ　江州膳所　智九

ちぶ木の葉中ゐちきき夢も有　京　蝶夢

瓢負ふ生きつゝ秋もつらおも　東尾

何をひむく伊勢の角人春さひし　大坂　田國

むとりちぶ梅まきむら寅ぶ　泉州　泉則

子ゐ秋のゆゝおとそ弓ゐ汐干ハ　東楚

一日を面化も書はもを見る秋　泉州堺　呉逸

雁ちつゝつまて春の海寒し　播州ゐ砂　布舟

ふとき達を麻ゐ笠の世帯ぶ　但馬　ゑ柳

山姥あやとのいふとの雲ゐ北吉　安芸廣島　風律

つゝときゝとさ秋　紀伊長島　野堂

ちぶ家ゐ是露ゐぶ月秋の角　上総　古

ふ波や鶏ちつゝむ風ちぶ荻　伊勢松坂　呉扇

のちぬ月ゐき世の八ちゆゝきり　滄波

酒のゝしきく秋ふぬきえゐつ　芹鷺

とのゝ姫ちふ御きゐふ寒きし　柳絮

かんこゐ常さ人ちふよさゐちぶ　春香

見おゐせを星を天ゐ屑ぶぶ　豊秋

たとゑのふやはらかなる籠ひさく　宗室

哀乃紅葉を浮山まもらひけり　豊永　五蓬

拙英鶏のくさきまに見つきけり　西山

面風やそせ路の花のおもかき　松坂　兎葉

きく乃花ちるへきを散てはまきり　泉石

傾城乃秋の床うゑやちふ一茎　翠渓

冠哀やてゑ桶ゑ常かまき　度雪

ふつきやせりき武のほの墓　信濃上田　子得

秋哀乃中ゑ門掃男か那　相西

庵乃子ら牛をてふふたとふらまし　尾州佐屋　木一舟

糸かきの老やくゑ奴ふ根芹つゝ　吟山

吸ゑ乃六時ゑを雑子ゑ嗚ゑ乃　名護屋　也有

春の曲やゑ居乃楽て居ふノ乃歌　八亀

きさはり蘆ゑ芝きて休ゑ人　多秦

冬川や箕ゑ行ふなきゆ鶏の羽　暁臺

ちゑ奴陽のなとそさ陽の節ゑふ　伊勢　隙雄

重解や毋ゑまゑふくゑ乃室　美濃中津川　山父

奴ゑそこゑ茶ゑ秋乃爲　森扑

いろ〳〵世をのがれぬる秋哉　信松代　祇東

友ふゝめる人もまゝ新を慰ふ秋　金丁

深〻きて　曉ものんと棟かゞり　眠花

末の芽低中道ゆくお深沓馬　善光寺　猿左

春を待虚舟寒しゐる此棗　又北

腫言く夫婦猪ふ川急この秋　百里

ものいたて涼き居ふ男かゝ　雞山

女郎花ふるを敷皮秋高ふ　守一　岩井

いり舟や秋旬のまもしねをき秋ふ　秋ふ

く武蔵野の月ひたひきり　小布施　風

生乃脊をぬま〳〵て秋をを打き雪　仮山　白亀

初汐や笘屋乃秋る人此声　上田　祖警

こゝを解て川ゝ二俵こゝ涼き利　松本　雲浪

坦刑等や推乃控ふ面雲　上毛伝田　大治

仰向も改風のふ此里此時ふ　岩井田　雞山

不〻きき野此　鷺山田　入楚

此〻乃木の沓ふ此里　川崎　杜什

ふ迷けゝ蕎麦よ花なきこ　浮石

川辺や人ゐもなくて紅ふらき　大坂　梅輩

もしくるかし山家あり梅の花　摂津　宗白

多くの川秋の日ひきのこる　勇州仙堂　菊史

紅葉や軒ふる声の春の雨　白石　丈芝

秋の川や苔ぬる岸そその色　東京　麦羅

数多居てものいく数暮の中の声　上州沼田　青就

筆太や外まくらに吹屋敷　舟

門まくらに陸奥なる落葉　眠色

おく野や大根掘ゆく山伏　烏孝

秋の日ゐ雲をふらきり　三河　魚釜

松と落葉の多く野の秋の風　甲州初狩　芝舟

代の多き外の中形ふまふ　双鯉

雪空北地枝ふるの赤小豆の南　白羽

椿はく夷やゐ之く　相中用田　多秋

山路踏てふる川秋の中を分　春塘

かんこゐかちて待ふきれも　夏木　梅明

山ぬきて鶯の羽ふる山ぬうゝ　青白

ふり見居ふゆ行の落葉風ゆ　茶路

大きや鶯餅を買し　塚のそん　琪彩
面代乃ほのうまもゆふ日和の南　飯田　玉祢
花のもとを髪かき撫ふ女かな　古梅　春江
牛塚を森と見んなの暑の南　小稲系　宵雪
うちらくと風ひのふ形を扇京　大磯　兎明
山乃井や蓋朱乃系たとる風薫　多路
まぶたをきぬつき女乃ゆきの南　小磯　紫雪
撫花杖杉はしもちくか形　江戸　大梁
ひるとうあいた多人と吹みり　花連

泉之
呉川
西味
江左
急閑
金按
連城
松京
金板

ひるとを忘れて七ふや紅さき
帰巣つくく見き老木形を
濃山を見をきり細乃水仙花
起さまを京枝乃を見ふきふ
鶏まをを田井を葉乃かふ
たりこ泉の面を春志ふ山家ふ
為て砕や媚むを兎の主仕
きりくを時や面枝乃上を履
ひるや煮仏ふふ在き濃ち屋

むくきちくやぬま仰向て　枯撑　曾城

石のいゆくあとの原やゆかて　三兎

暮うふかつる義山乃毛ふし　暮京

梅乃毛見せつゝ母乃くちふり　木の女

かき掛ひてぬしちきり二条麦　桃魚

き柳を枝をちさぬしゑ　百舟

四時文通

春きしや松まかふ鶯北声　百明

埃乃華ふのゆゝふふ菱世の南

、

墨ふも長秋ふの母　修子

藤秋篠ふ文の白ふ海色ふ

学るやいさふて居ふをふ加毛　字石

ふ乃重世のなりさ乃をかくり

大空ゆ苗代乃波つふふ　紫松坂　牛墨

荒庭ふ百合ひともふ蛍ふ

くゆ久はくふしはふを常

山茱花の大ふ咲ては舞ふ　信倉

何小田を行ふ鳴はしふ郭ふ南　古溪

一方をば松にまきて夜曲より
おもてのこれとしたち寒き秋のそ
時よのたの意柿はちるは加ほ多
ちらへ見えたる小田乃畦
てたらしは俳道を志ひろ
くくあるもの志ものに水鳥小庭より
れ家ひや一声言我秋の蛙
くき雲や混柿系化のこゑ暑
夜重ね多形へ松のゆ未より

下伝 大牛
にの 孫南
松翁老人

南くら志氣乃一冊松翁先生の多かと
形里よりふを流れ成ぬ世とは志時ら
塵月中をとひた（ふる志つ）とか能世時
芭蕉翁農恪ふてき彩もの志ち戸の
いさこと 姥をて山路秋のそ乃ふらに
比す庵（角）ふる お稟せ の 禅法志ろを
芭蕉 この 枕志氣 多 林 先師の暮 恪ふ

かきふたりなすよとせゝほとゝきすきくる
つちゆくこゝ[illegible]　紫式部乃わゝ巻い
そのもゝ[illegible]元ゝかきてたゝきとゝまゝ祈うひ
ふるとけり名をもとめむと[illegible]とゝ[illegible]
[illegible]るこの南を[illegible]と[illegible]風[illegible]の文[illegible]
ゝこゝろもつふけり歟まさきのまこゝ[illegible]ふるを
おもへをふるむのもゝ[illegible]てゝ[illegible]
いふゝとつ成す

たゝ[illegible]

書肆
江戸本石町十軒店
植村藤三郎
京寺町二條上ル所
橘屋治兵衛